

閑話：熱帯雨林の話

今回は少し話題を変え、アフリカの熱帯地域に広がる森について触れていきたい。

コンゴ共和国は赤道直下の国で、首都ブラザヴィルは南半球にある。首都の北側には広大な平原が広がっている。初めて見た果てしなく続く平原とその向こうに広がる地平線は、実に感動的で、まさに「アフリカのサバンナ」というイメージと重なる。象やキリンが悠然と歩いても決して不思議でない光景なのだが、残念ながら野生動物はほとんど見かけることはない。

コンゴで野生の動物と出会うには、さらに数百キロ北へ行く必要がある。そこはコンゴやガボン、カメルーンなどにまたがる熱帯雨林で、ゴリラなどさまざまな霊長類の他、ワニやカバ、象などが生息している。アフリカ大陸の歴史によれば、現在のナイジェリア地域にいたバンツール人が大陸全体に広がる過程で、赤道付近にあるこの熱帯雨林地帯は避けられていったようである。そのことによりガボンからコンゴ、アンゴラに広がった西バンツール系とケニアやタンザニア、モザンビークへと広がった東バンツール系に分かれた。狩猟採集民がいるこの広大な熱帯の森に農耕民であるバンツール人が入っていくのは6世紀以降になってのことだった。

私はこの熱帯の森にまだ足を踏み入れたことはない。しかし、森に関わる興味深い話を多くの人から聞いた。ここでは、そのなかの3人を紹介していこう。

その一人は、高野秀行氏である。1988年の春、彼は早稲田大学の探検部のリーダーとして、コンゴの北にあるテレ湖に生息するという「モケレムベンベ」と呼ばれる珍獣の発見を目指していた。「ネッシー」ほどメジャーではなかったが、探検部たちの珍獣発見にける意気込みは本物だった。珍獣を熱く語る高野氏の姿に、珍獣は本当にいるかもしれないと私も期待した。森のなかで1カ月余りの野営キャンプを張っての観察を敢行したようだが、結局発見には至らなかった。首都へ戻ってきた探検部員の疲労困憊した姿から、「原始」の森の過酷な生活が想像された。なお、このときの探検の記録は『幻の怪獣ムベンベを追え』（早稲田大学探検部、PHP 研究所、1989年）にまとめられている。

2人目は、コンゴの北の森で象による農業被害を調査した萩原幹子氏である。この地域に生息する象は、マルミミ象と呼ばれ、密林のなかでも移動しやすいうように小柄で耳が丸いのが特徴だ。絶滅危惧種に指定されており保護の対象になっている。保護区が設けられたが、人の生活空間と重なっているところがあり、そうした集落には狩猟採集民もいれば農耕民もいる。彼らの農地を象が荒らすという被害が起きている。萩原氏はこうした象の被害の実態調査を行った。野生動物と人間の共存の難しさを感じた。彼女はこの調査のために5年、北の森で地元の人のなかで生活をしたという。彼女の流暢なリンガラ語から、いかに住民に溶け込んで調査を行っていたかを窺い知ることができる。この調査に関する内容は、来年おやさと研究所から出版される『エコロジーと宗教性の深化』に掲載される予定である。

3人目は天理大学国際学部の服部志帆氏である。コンゴではないが同じく熱帯の森に住む狩猟採集民の調査を行っている。文化人類学者の彼女は、森の住民たちと共に暮らしながら調査をして

いる。その彼女が今年4月、『アフリカの森の女たち 文化・進化・発達の人類学』（原著者：ボニー・ヒューレット）という本（翻訳）を3人の共訳で出版した。この本は本誌6月号でも紹介されたが、ここでも内容について簡単に紹介したい。

この本の中に登場する女性は4人。狩猟採集民と農耕民の2人ずつの計4人である。どちらも熱帯雨林に居住していて、その生活にはさまざまな面で相違点や共通点がある。年齢層はどちらのグループも40代と70代の女性であり、同一グループにおける世代による違いを同時に感じることができる。「この本の核をなすのは、生活、過去、現在について詳しく語るコンゴ盆地の女性の声」と原文の著者は言う。

実際に「ねえ、聞いて」という女性の日常の生活空間での「語り」に多くのページが割かれており、フィールド研究における聞き取りというようなものではなく、女性自らが自発的に語るまさに「おしゃべり」だ。だからこそ、彼女たちの「語り」は、生活の赤裸々な描写が満載で、思春期を迎え異性を意識するようになる少女の胸の内、初めて夫と過ごす夜の心境、夫婦の夜の営みの描写、家庭内暴力の様子など、その内容はリアリティに溢れている。読んでいくうちに何か近くの出来事のようにさえ感じられる。

これまで知ることがなかったアフリカの「奥地」での、女性たちの生活の生の「語り」には、一人の人間が一生のなかで経験するさまざまな出来事が含まれており大変興味深い。そしてそこには、「先進国」と言われ、熱帯雨林とはまったく異なる生活空間にいる私たちと共通するものも少なくないことあらためて気づかされる。

また、本書にはさまざまな学術的専門用語が出てくるが、こうした用語には注釈や解説がある。専門家でなくてもアプローチしやすいように配慮されていることだろうが、そこにこの本の訳者たちの思いが感じられる。訳者の3人は著者自身と同じ熱帯雨林の森をフィールドとする研究者で、そのアフリカの魅力を多くの人に伝えるため日頃からさまざまな活動をしている人たちでもある。「この本が学術書としての価値だけでなく、遠く離れた日本に暮らす読者にとっても現代社会を生き抜くためのヒントが詰まったもの」（訳者あとがきより）という見方から、フィールドワークを通じて、現地の人たちから多くの学びを得ている研究者としての姿勢が伝わってくる。さらに、こうした地域を研究している人たちの体験などを綴ったコラムも盛り込まれ、「アフリカの森の女たち」が語る生活空間にさらなる深みを醸し出しているように感じられる。

珍獣の話題から動物と人間の共存、そして同じ人間同士の関係性へと、熱帯の森の話は実に奥が深い。現在、高野氏は「元祖珍獣ハンター」と呼ばれ、ノンフィクション作家として活躍している。萩原氏は「世界の村で発見・こんなところに日本人」（朝日放送）などに登場し、今もコンゴを拠点に通訳やコーディネーターとしてさまざまな活動を続けている。私もいずれ北部の熱帯雨林へ行ってみたい。ただそのときは、服部氏のように森の民と一緒にする「サバイバル」な生活も魅力的ではあるだろうが、現地住民の案内の下で、マルミミ像に乗っかって、モケレムベンベを見るツアーがいいかなと秘かに思っている。